

巻 頭 言

—個性ある生物資源科学部を目指して—

生物資源科学部長 谷口憲治

Dean, Prof. Dr. Kenji TANIGUCHI

生物資源科学部研究報告の第13号が発行される運びとなりましたが、ここに至るまで尽力された学術研究委員会および関係された皆様に深謝いたします。

生物資源科学部研究報告は、生物資源科学部が創設された翌年の平成8年12月に第1号が発刊されましたが、その後、平成16年4月からの国立大学法人化の中で、それまでと同様に研究論文を掲載するとともにそれ以外にも生物資源科学部におけるその一年間の諸活動を広く紹介し、次年度活動の向上にも役立てるという形態となりました。国立大学法人化は、「自主性・自律性」、「自己責任」、「競争的環境の中で個性が輝く大学」という内容をもつものとして組織編成されてきましたが、こうした中で学部研究報告は、学部の個性を客観視するものともなりました。現在、六年間を単位とする第一次中期目標・計画も、四年経過し、次期目標・計画についての対応も具体化される時期となってきましたが、今後、島根大学生物資源科学部の「個性」が、教育・研究をはじめとする諸活動で求められることが予想されます。生物資源科学部は、学部創設13年、それ以前の農学部、理学部、さらには農科大学、農林専門学校といった基盤の上に「個性」が成り立っていることを改めて認識することが必要であると思います。この生物資源科学部研究報告についてみても同じことがいえ、これまでに発刊されてきた研究報告を基盤として今日のものに繋がっているのです。つまり、教育研究の継続性とその創造的発展性を客観的に示す基礎データとしてこの研究報告の存在があり、学部の一つの「個性」を表現しているといえます。この基礎データは、島根大学ホームページの「知的情報データベース」に記されており、研究論文等具体的な活動内容を知ることが出来ます。そこで、このデータから学部の「個性」をみてみると、まず、農学部関係では島根県立農林専門学校研究報告は、昭和25年7月30日に第1号が発刊され、竹崎嘉徳校長の「発刊の辞」以外は、時代を反

映した農業生産増強にこたえようとする内容が多い論文集となっています。島根農科大学研究報告も、大学全体で島根県の要請に応える調査報告や教養担当者も含めた論文集で、このことは、最終の第15号の梶田茂学長の「序文」に「農学223編、林学85編、農林経済51編、農芸化学6編、農業工学3編、一般教育34編」と紹介し、「学会や産業界に、またとくに地域社会の発展に大きな貢献をしてきた」ということに示されています。これを受け継いだ島根大学農学部研究報告も論文と資料紹介のみの論文集として続いていきました。この中で、昭和54年の第13号における山田一郎農学部長は、大学の方向について「地域に根をおろした地方大学の姿作り」を述べ、研究報告も「いちだんと質の拡充」を指摘するとともに、その「速報性」にその独自性をみていることは、今日の課題とも重なり注目されます。この指摘後も論文集は続きますが、昭和62年の第21号からは、論文以外にその一年間の業績目録が掲載され、そこには各学科講座別の教官名と著書、学会誌論文、学会発表、その他論文が紹介され具体的な研究活動が公開されることになりました。この形式は、生物資源科学部研究報告第1号になっても引き継がれ、国立大学法人になった平成17年からは学部長による巻頭言が加えられるようになっていきます。理学部生物学関係では、昭和26年からの島根大学論集、文理学部紀要、理学部紀要がありますが、いずれも論文集形式ですが、この地域の生物を研究対象にしたものも見受けられます。

これらのことから、この学部の研究領域における普遍性ととともに地域を研究対象としてきた「個性」が窺えます。次期中期目標・計画には学部の地域個性が一層求められるようで、そうした面での教育研究の独自性を明確にしていく必要があります。その具体化の一つがこの学部研究紀要の充実にあると思われます。